

氏 名	邱 安 富 キユ アン フ
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 626 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	肺癌における所属リンパ節の免疫グロブリンに関する免疫組織学的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 濱 島 義 博 教 授 安 平 公 夫 教 授 寺 松 孝

論 文 内 容 の 要 旨

ヒト肺癌に於いて、免疫反応の第1関門であり、しかも免疫グロブリン産生母地である肺門部所属リンパ節が、抗原刺激を受けた後、そのリンパ節内の免疫グロブリン保有細胞の分布の変動が起りうることは当然予想される。これを追究することは生体の局所または全身の免疫反応の究明に意義があると考えられる。本研究は症例の血清免疫グロブリン値を測定する一方、肺癌23例（扁平上皮癌11例、腺癌7例と未分化癌5例）の肺門部所属リンパ節内のIgG、IgMとIgA保有細胞の分布と相互の間の比率変動を蛍光抗体法（直接法、主として二重染色法）で調べた。対照として、肺結核9例と自然気胸5例の肺門部所属リンパ節における免疫グロブリン保有細胞の分布と変動についても検討した。

扁平上皮癌11例の肺門部所属リンパ節内癌転移がみられる場合には、IgG保有細胞の平均比率は64%、IgMは25%、IgAは11%であった。癌細胞の転移がみられない場合には、IgG保有細胞の平均比率は58%、IgMは29%、IgAは13%であった。腺癌7例の肺門部所属リンパ節内癌転移がみられる場合には、IgG保有細胞の平均比率は63%、IgMは28%、IgAは9%であった。癌細胞の転移がみられない場合には、IgG保有細胞の平均比率は59%、IgMは29%、IgAは12%であった。未分化癌5例の肺門部所属リンパ節内癌転移がみられる場合には、IgG保有細胞の平均比率は66%、IgMは22%、IgAは12%であった。癌細胞の転移が見られない場合には、IgG保有細胞の平均比率は56%、IgMは30%、IgAは14%であった。

肺結核症9例の肺門部所属リンパ節内IgG保有細胞の平均比率は55%、IgMは28%、IgAは17%であった。

自然気胸5例の肺門部所属リンパ節内IgG保有細胞の平均比率は49%、IgMは26%、IgAは25%であった。

免疫組織学的に検討した結果：

(1)リンパ節の基本構造が保たれている場合には、免疫グロブリン保有細胞は髄索に最も多く、皮質では

interfollicular zone と submarginal sinus の周囲に散在性に認められた。リンパ節の基本構造が炎症や癌の浸潤、またはその他の抗原刺激等によって破壊されている場合には、皮質と髄質の区別が出来ないために、免疫グロブリン保有細胞の分布の局在性が不明瞭となり、免疫グロブリン保有細胞はびまん性に散布する。germinal center には殆んどの場合、1種類の免疫グロブリン保有細胞しかみられなかった。

(2) follicular hyperplasia は肺癌で最もしばしば認められ、病巣が安定化した肺結核症と自然気胸の場合は少ない。

(3)肺癌肺門部所属リンパ節に癌細胞転移がみられる場合には、転移がみられない場合より有意差をもって IgG 保有細胞が高い比率を示す。

(4) IgM 保有細胞の比率について、肺癌と肺結核との間には有意差を認めないが、肺癌の場合は IgG 保有細胞の比率は肺結核より有意な増加がみられた。

(5)肺癌肺門部所属リンパ節は癌転移がある場合には、相対的にリンパ組織の面積が減少するが、単位面積内免疫グロブリン保有細胞数は減少しないか或いは増加する傾向を示す。即ち、癌細胞の転移があっても所属リンパ節内の免疫グロブリン保有細胞の増殖反応は活発である。

(6)血清中免疫グロブリン値と肺門部所属リンパ節内免疫グロブリン保有細胞の比率には一定の関係が見出されなかった。

論文審査の結果の要旨

癌における所属リンパ節が癌免疫の重要な関門であることは、すでに動物実験的には明らかである。本研究は、癌における体液性免疫成立機序の一端を解明すべく、ヒト肺癌の所属リンパ節の免疫グロブリン保有細胞の変動について、蛍光抗体法を用いて検討したものである。ヒト肺癌例23例と対照としての硬化性肺結核例9例および自然気胸例5例、計37例について、それぞれの局所リンパ節内の免疫抗体保有細胞を IgG, IgM, IgA 保有細胞に染め分けて検討している。結果の主なものは、肺癌では他の疾患に比べて、局所リンパ節内の IgG 保有細胞の分布率は推計学的に有意に高く、また癌転移を認めたリンパ節内での残在リンパ組織内のそれは、然らざるリンパ節内よりも有意に高率である。しかし IgM 保有細胞等では差は認められない等で、この他数項の知見がえられている。本研究は、動物実験の成績から一部で主張されている癌免疫における体液性免疫の存在を臨床的成績から示唆したものであり医学上有益である。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。